

荒神橋事件の時代

— 板東慧氏に聞く —

今 西 一

はじめに

板東慧氏と言えば、「構造改革」派の論客で、日本の労働問題研究の大家である。共著・編著を入れると31点の著書があり、論文が200点を超え、調査報告者が120点ある。行政関係では、1971年の神戸市教育委員（2期）からはじまり、現在でも神戸市勤労者共済事業審議会の会長である。大学も八代学院大学（現・神戸国際大学）、中部大学、大阪産業大学の三つの大学の教授と勤め、学生部長や学科主任、研究科長などの役職も務められた。何より現在でも、国際経済労働研究所を主宰され、20人のスタッフを抱え、機関誌『Int' lecowk』は、通巻1000号を超えている。海外調査も90カ国を超えており、まさに「現場第一主義」の人である。

私が参加した今春の氏の傘寿の会では、神戸市長から国会議員、兵庫県の労働組合の関係者など、実に多彩な人物が参加しており、氏の華麗な人脈に驚かされた。私が板東氏にお会いしたいと考えたのは、氏が1953年11月11日の京都での荒神橋事件によって、京都大学を「無期停学」された一人であったからである。この事件については、既に小畑哲雄氏（小樽商科大学『人文研究』第120号、2010年）、上田篤氏（同、122号、2011年）などの聞き取りの記録を公表しているが、いくつかの評価の喰い違いが生まれている。上田氏は、この事件を共産党の軍事組織であったYの挑発による、「極左冒険主義」であったとされるが、後述するように板東氏の評価は異なっている。氏は、傘寿を記念して、『昭和とは何であったか— 桁生まれが語るその光と影』（日本評論社、

2012年)を書かれたので、インタビューと重なる部分があるが、まず本書の内容を紹介しておきたい。

1 「神戸っ子」の少年時代

兵庫県の神戸市では三代続いた家に生まれた人物を、「神戸っ子」と呼んでいる。その意味では氏は、生粋の「神戸っ子」である。神戸というのは、明治の開港によって、急速に人口が開けた町で、ニューカマー（新移住者）が多いので、「神戸っ子」は稀少である。氏の父方の祖父は、第一次大戦のドイツ人捕虜収容所で有名な徳島県の「板東町」(村)の出身である(映画『バルトの楽園』がある)。全国で木偏の「板東」は、この地域だけである。中学校を卒業すると兄と神戸に出てきて、通運企業の検査会社の会社員になった。祖母は広島県の音戸ノ瀬戸のある倉橋村という漁師の出身で、神戸北野の外国人商社の給仕兼事務をやっていた。当時は、徳島県や広島県は、九州の一部の地域とならんで、移民の多い県であった。なかでも神戸には、新興の海港都市として、近隣府県から若者が流入し、特に居留地の周辺一現在の三宮界限に集住した。

父信夫氏は三宮で育ち、雲中高等小学校を出て東神倉庫(後の三井倉庫)神戸支店に勤め、夜学に通って英語を習得した。母富美子氏は、兵庫県の姫路の出身で神戸の貿易会社に勤めていた。板東氏は、その両親のもとで、1931年9月17日に神戸の上野通で生まれている。しかし、父の両親と同居することになり、摩耶小学校の近くに引っ越すことになった。父の両親と二人の妹といった、三世同居の家族であった。この二人の叔母からは「映画の知識や世間の知識を教わった」そうである。

小学校では、その頃は1~2年は男女共学で、3年からは別学であったが、板東氏の場合は、3~6年は先生も持ち上がりで、クラス編成が変わらなかつたが、二学期はいつも級長であった。小学校入学の1年前から日中戦争が始まっていたが、「比較的のどかな小学校時代をおくれた」と語っている。国家統制はすすむが、「神戸市民社会」では、一定の「市民生活の自由度」は維持され

ていた、というのである。しかし、小学校1年の時に出会った、1938年の神戸大水害の記憶は鮮明で、この復興によって「新しい神戸が生まれた」と語っている。

板東氏は、敗戦の前年、1944年に神戸一中に入学するが、この年の7月、サイパンが陥落すると、B29の飛来が目立つようになってきた。翌45年の1月19日、隣接都市の明石が襲われる。それは川崎航空機工場など軍需工場を狙ったもので、B29が63機飛来して、死者も347人にのぼった。神戸市民には、「さほど緊迫感」はなかったが、同年2月4日、神戸の西部工業地帯に、最初の大空襲（B29が85機飛来）があって、神戸市民にも「衝撃」がはしった。

板東氏は、2年生になると、焼け跡の「水道管の漏水停止処置」という勤労働員に、週の内2、3日はかりだされるようになった。後年、「これは中学二年生程度のやんちゃ盛りの仕事としては適職」だったと回想している。もちろん死体や不発弾に出くわすこともあった。しかし、4月1日の空襲では、従来の焼夷弾から1トン爆弾に変わり、神戸で1093人、西宮で85人、芦屋で39人の死者をだした。

さらに6月5日には、神戸市街地への大規模爆撃の第二弾として、B29が350機飛来し、死者も3453人にのぼった。100万都市神戸も、この2度にわたる大空襲で、市街地の7割まで建物を消失させた。軍の連隊区司令部も被災して、神戸一中に移ってきて、校舎を共同で使用するようになった。結局、8月6日まで神戸は5度の空襲を受け、市街地の8割以上が焼け野原と化した。

そして8月15日に敗戦の玉音放送を聞くが、「廢墟のなかで空虚な大穴が残った」という虚脱感であった。しかし、8月20日頃に市街地に出ると、状況はすっかり一変していた。阪急三宮駅や国鉄の高架下には「ヤミ市」が乱立していた。急変のひとつは、「あの窮乏化した戦時食生活のなかで、このような大量の食料品がどこにあったのか」という驚きであった。この食料品は、一部は密輸品もあるだろうが、大半は戦時中に軍や官公庁が備蓄していた「隠匿物資」であった。すでに戦時下で「闇ルート」が確立していたのである。その主人公は、「第三国人」と呼ばれる在日の中国・台湾・朝鮮半島出身の人びとであった。特に

「国際都市」神戸では、「ヤミ市」が盛業であった。一般の市民の生活は配給制度に支えられたが、ヤミによって補完されていた。「超インフレと食糧難が都市生活を襲った」。

しかし、教育の「民主化」は急速に進み、45年9月には、文部省が国定教科書の部分削除を通達する。いわゆる「スミぬり教科書」である。翌10月には学校における軍事教練が全面的に廃止され、あらゆる軍事装備が撤去された。同月30日には、軍国主義教員の即時追放を指令している。これを先導するように、9月10日、物理学校（東京理科学校）、10月6日に水戸高校、続いて8日に私立上野高女で校長退陣要求の運動が起こっている。

神戸一中では、教師たちが戦時中の暴力行為などを謝罪し、民主教育をすすめることを約束している。西洋史は近代史からはじめて市民革命からロシア革命まで語り、生物学では進化論を中心に授業を行った。しかし、「教師が怒れなくなった一面があり、遅刻や授業態度のよくない生徒の増加もみられた」。それでも生徒会活動や新聞部などが活発化するが、4年生の軍からの帰還組が、「一種のアンシャンレジーム（旧体制）」への復帰を企劃して、CIE（教育司令官）とMPまでが学校に乗り込んでくるという事件が起こった。

板東氏は旧制中学4年の時に、新制神戸高校の2年に移籍する。教師も「従来の高等師範学校出身よりも大学出身者が増え、教育指導内容も専門的に高度化し」、映画部に所属し、図書委員になっったりして、さまざまなイベントを企画するようになる。本書では触れられていないが、この頃、50年代初頭の京大共産党のリーダーになる榎並公雄氏と出会っているのも興味深い。ともかく戦後の文化的「解放感」を満喫した高校時代であった。

2 京都大学の生活と運動

1950年に京都大学に入学するが、教養課程は宇治の火薬庫跡の研究所群で始まった。まるで「林間学校のもようであった」。宇治分校は、黄檗山萬福寺の傍らにあり、古き良き京都の郊外であった。板東氏は、「授業を午前中にすませて、

桜よし紅葉よし, 宇治・醍醐界限はもちろん, 嵯峨野・大原の里」を散策した。当時の京都の学生下宿の賃貸料は, 「ふつうの家屋で昼一昼100円が相場であった。食事つきを選ぶ者もあったが, 大多数は大学食堂で三食すます者や一部自炊やその他学生街の食堂ですませていた」。大学食堂は, だいたい生活協同組合が運営していた。当時はまだ配給制で, 米の配給切符1枚で1食というように, 切符を持参しなければ食べられなかったが, 1952年頃から自由米が出回るようになった。また宇治時代には, コンパというと板東氏の下宿が使われたが, 専門課程では百万遍の少し先にあった「韓国人部落でのホルモンの七輪炙り焼きと濁り酒がもっぱらとなった」。

教養課程の授業は, 「ほとんどわが国の各国文学界をリードする翻訳者たちが授業を担当していた」。そこで板東氏は, 「英・独・仏・露の四科目を履修し, 試験」を受けている。これはその後の氏の90カ国の調査旅行に, おおいに役立ったそうである。専門課程では, 経済学部は古い教授が追放になっており, 新進気鋭の教授・助教授が多かった。彼らは戦争体験を経た復員組が多く, 発禁書に触れる機会も少なかったので, 年齢の近さということもあって, 共同で研究する態度が強かった。しかし, 内容はマルクス経済学への傾斜が強くて, 近代経済学は排撃された。

1950年6月25日, 朝鮮戦争が勃発すると, コミンフォルムの野坂参三氏の「平和革命」論批判を受けて日本共産党は「所感派」と「国際派」に分裂し, その間12月10日までにはレットパージによって解雇された人びとは, 1万972人にのぼった。共産党は朝鮮戦争下に, 51年2月の第4回全国協議会を開き, 8月に第20回中央委員会での51年新綱領(草案)を提出した。綱領は, 日本の革命を「反帝国主義・反封建」の民族解放民主革命と規定して, 五全協で採択された。四全協で決定された山村工作隊や火炎瓶闘争は各地で展開した。

これに呼応して, 学生運動も激しさを増してくる。50年5月には東北大でCIEのイールズの講演に反対する闘争が生まれ, 大学当局は3人の退学を含む14人の処分を発表した。北大などでもイールズ闘争が展開した。レットパージ反対闘争も各地で起こり, 全国で223人の学生が処分された。

京大では、51年11月12日、いわゆる京大天皇事件が起こっている。天皇の京大巡幸に対して、京都大学同学会（全学自治会）は、公開質問状を出すのが大学当局に断られ、2000人近い学生や教職員が時計台前広場に集まっている時、天皇の車が到着すると、期せずして群衆のなかから「平和の歌」の大合唱が起こった。その後警官隊が導入され、13日には同学会解散、8人の学生の処分が決まった。

学生としては同学会解散や処分は不当だとして、「全国各大学への遊説によって実情を訴えることになり、そのセンターをつくり、統一した実情報告のための全国遊説隊を派遣することになった。応募者が50～60人前後出てきて、北海道から九州まで、11月半から1カ月程度の期間で実施した」。

板東氏は「東京方面へ約1カ出かけた」が、ここで彼が見たのは、都学連と全学連との奇妙な関係である。都学連は「所感派」、全学連は「国際派」で、「犬猿の仲」であった。京大は圧倒的に「所感派」であったから、「われわれのめんどろをみしてくれるのは都学連の連中だったので、この分裂騒ぎには違和感があった」。板東氏は、「この東京での経験は学生生活の一大イベントとなったが、後ほど考えると、共産党の分裂によって弱体化した主流派グループとその傘下の自治会の補強に活用された感じがあった」としているが、鋭い読みである。

この後に52年を迎えると、労働界では産別会議の衰退から総評が主流となるなかで、共産党勢力の衰退が明らかになり、「国際派」が指導していた全学連も、内部の「リンチ査問」事件などによって衰退していった。そこに「所感派」の軍事方針が影を落とし、小河内ダム建設反対の山村工作隊員23人が検挙され、破防法反対闘争が起こるが、5月1日には「血のメーデー」が起こっている。このなか、6月25日に京都の立命館大学で行われた全学連の第5回大会では「所感派」による執行部が選出された（地下室での「国際派」代議員へのリンチ事件）。さらに6月24日の大阪の「吹田事件」、名古屋では死者もだす「大須事件」などの民衆騒乱が続出する。

この夏、京都大学の各学生自治会は「学生の全国帰郷闘争による夏休みの反戦啓蒙活動」を展開していたが、「その最中、理学部と吉田寮から、何者とも

知れぬ火炎瓶の備蓄が警察によって摘発された。「くわしくはわからないが」としつつも、この「共産党の武装闘争を担っていたのは当時、内部で通称「Y」というグループで一般共産党組織と別個に組織され、別個の指揮命令系統をもっていたとみられ、武道や格闘技のスポーツマンをスカウトしたり、いわゆるアジト（隠れ家）のためや賄いの活動の女子学生をスカウトしていたことをおぼえている」と語っている。

3 荒神橋事件の頃

1950年代初頭の「京大の共産党勢力は、学生数百人、教職員数百人で合わせて1000人近くなる勢力で、おそらく日本最大であったと思われる」。「指導する地区委員や京都府委員にも京都大学出身者が多かった」。「京大は単位細胞ではなく各学部や研究所が単位細胞で、京都大学は細胞群委員会を形成していた」。

板東氏は、「入党決意後、3カ月の（党員）候補期間をまだわからぬ点があるということで引き延ばしてきた」が、「3回生で府学連の委員長になり、1953年の夏には同学会が復活したので、同学会副委員長として（京大に）戻った。皆の手前、あまり党員候補でがんばるのもいけないので、不本意であるが正式に入党した」。

1952年頃の府学連は、「京大・同志社・立命・工業繊維・学芸など、国立といくつかの私学の自治会が入っていたが、同・立は別として、やはり山村工作隊や火焰瓶闘争の影響と共産党の一種の引き回しで、学生自治会も相当衰弱していた」。「それで全学連の機能が弱いので、京都府学連として呼びかけて、西日本学生生活改善会議や西日本学生平和会議など、一般学生の参加しやすい会議を主催し、多数の参加を得て成功」させ、各自治会の再建をはかった。

それでも板東氏は、1953年7月の朝鮮戦争の休戦協定が成立した時、朝鮮休戦歓迎集会の商店街連合会から提灯行列の提案があったことを、共産党のグループ会議で紹介した。すると関西ビューローの幹部は、「この休戦は闘い取ったものである。提灯行列などもってのほかで、河原町界隈を火焰瓶を投げて祝

うべきである」と言い放ったそうである。氏は「共産党の場合は、学生運動も労働者・農民に奉仕せよ、となりがち」でよくないと考えていた。「幸い、大阪府学連もその点では比較的共通していて、共産党関西ビューローの当時の学生・青年対策もわれわれの先輩で、この点はあまり無理をしないという方向で共通していた」と語っている。

1952年には「破防法闘争」もあり、「大衆運動は盛り上がったが、学生内の共産党組織は新方針からかなり無理をして衰弱していた」。板東氏は、53年に京大同学会の副委員長に戻ってからは、「学園に復興」が重要だと考え、全学連とも連携をとり、新しい中央委員会を開き、また委員長を京大から送りだし、全国的に方針の徹底をはかった。これが「学園復興会議」であった。しかし「問題は会場であった」。「京大法経第一教室を主会場として申し込んだが、大学側が拒否してくることは当然予想されたので、立命館と同志社にいざという場合の会場借入の可能性も申し入れた。結果として相変わらず京大は拒否してきた。

「大会前日、東京の共産党ビューローから幹部も来て、大会対策の会議が開かれた」。「われわれとしては、この大学の態度には抗議はするが」、「せっかく全国から集まった各大学代表に意味のある議論ができる会場の確保を求めたが、いままでどおりの突撃論も多く、共産党は当然、突破論であった」。「われわれ京大内部でも議論はわかれた」。「共産党側は「壁や建物などモノの復興より権利だ」とも主張した」。そこで「時計台前の抗議集会は共産党中心の有志の活動であることを明確にして、同学会でないことを明らかにすることとして、副委員長・私と総務部長・松浦（玲）とはいっさい姿を見せないようにした。じつは、二人で会場の状況だけ見渡せる高所にいて、成り行きを見ていた」。

ところが、「40分ばかりして、「たいへんだ」という声とともに知らせがきた。荒神橋で橋から落ちた者がいるというわけ、ただちに松浦と自転車に向かって。（中略）その後、立命館で教授を交えて内実ある会議になったものの、ふたたび府警本部への抗議に出向いたようである」。

この辺の板東氏の記憶と、先述の小畑哲雄・上田篤氏らの証言とでは、若干の喰い違いがあるが、いずれ詳論を予定している。板東氏は、「まず各患者を

民医連の病院に移すことや病院との折衝」にあたっていた。「あらためて学園復興という内容で実りある会議によってわが国学生運動の路線を模索しようとしたわれわれの意図は、ふたたび会場争いの権力闘争でかき消」された。「その後、この警察と大学当局に抗議する学生の無届デモは約一カ月以上、処分発表後もほとんど毎日のように京都の街を練り歩いた」。

結局、「京大の傍にある旧西園寺別邸で文部当局と大学当局」との会議が続けられ、12月1日、学生処分が発表された。松浦氏は「放学」、経済学部の3人は「無期停学」となった。翌54年に「松浦の処分理由に誤りがあり、弁護士を立てて、法廷闘争にもちこんだ」が、「松浦裁判が終わるまでわれわれの無期停学は解除できないという新たな論理を滝川（^{ゆきとき}幸辰）学長は持ち出した」。裁判では「残念ながら文部官僚と有名法学者の論理を打破できなかった」。

その後、板東氏は54年に関西学連の委員長に就任し、「学生ゼミナール運動」を展開する。55年の共産党の六全協によって、「党活動家として学外にいた者が京都大学で数十名おり、復学手続きにわれわれも助力し、大学との交渉にあったが、その前後に、少なくとも3人が自殺した」。大学の停学解除が56年末に可能になり、57年3月に卒業した板東氏は、労働問題の研究者としての道を歩みだしている。共産党とは、61年の新綱領で、「従属国革命の域を出ず、労働組合に対しても従来の共産党への従属体制評価から一步も出なかったので、私は関西労調事務局のなかにいる共産党員全員とともに党と袂を分かつことにした」そうである。

本稿の聞き取りは、2011年2月2日、兵庫県の板東氏のお宅で行った。電話1本で、多忙な中、長時間のインタビューに応じてくださった氏に感謝したい。また、この原稿を起こしてくださった、北海道情報大学の天野尚樹氏にも感謝したい。

板東慧氏のインタビュー

1 生い立ち

今西：まず、お生まれから聞かせてください。

板東：1931年9月17日、神戸の生まれです。

今西：ご両親のお名前を教えてくださいませんか。

板東：父は信夫、母は富美子です。

今西：お父さんも神戸の方ですか。

板東：ええ、祖父はもともと徳島の間人ですが、明治20年に神戸に出てきて、それ以来です。当時は、海洋民族はみな神戸に出てきたのです。徳島に板東という地名がありますが、そこの出身です。板東というところは、第一次世界大戦のとき青島で捕虜になったドイツ兵の捕虜収容所があったところ。板東のある板野郡は吉野川の下流にありまして、板野郡板野の西側が板西、東が板東といいますが、板西という苗字の人はいませんが、板東の方は、明治になって苗字を名乗ることになったときほぼ全員が板東を名乗ったんです。みんな木偏の板東です。野球選手になった板東英二も同じです。関東ですと坂東太郎で土偏の坂東ですが。こごと偏の阪東は芝居をやる人に多いですね。そういうわけで、出自は正真正銘の徳島の出です。

祖父は、高等小学校を出たぐらいの年齢で兄弟で神戸に出てきました。祖父の兄は職人的な仕事に就きましたが、祖父は海運業の会社に入りました。祖母もやはり海洋民族で、広島府の呉の南方の音戸のある島の出身で、やはり神戸に出てきました。明治の時期の神戸には、海運・建築をはじめ、さまざまな業種に各地からたくさんの人が出てきて働くようになりました。

今西：神戸の街自体が新しい街ですよ。

板東：平清盛ゆかりの和田岬の西側が兵庫津で、こちらは北前船の伝統もあり、大坂に入る最終地点です。幕末の時点で2万6000人ほどの人口がありました。一方、和田岬の東側が神戸村で、こちらは幕末の頃はまだ人口2000人ほどの寒村です。

今西：小さな漁村のような感じですよ。

板東：幕末に開港したのは本来兵庫ですが、ふたつが合併して、さらに新港をつくったのは東側なんですね。そこに居留地ができ、やがて1889年の市制施行時には20万人を超える人口にまでなりました。

今西：急速に膨張しましたからね。

板東：神奈川と横浜の関係と同じです。

今西：神戸ではどの辺にお住まいになられたのですか。

板東：三宮近辺です。

今西：お父さんはどんな仕事をされていたのですか。

板東：三井倉庫に勤めていました。財閥は鉱山と倉庫からはじまります。鉱山と金融が財閥の一般的基礎ですが、海運の場合はそれに倉庫があります。これは江戸時代からで、三井倉庫、三菱倉庫、住友倉庫とそれぞれあります。もっとも、三井倉庫という名前は戦後になってからで、当初は東神倉庫といいました。東京と神戸にありましたから。

今西：そこではどういう仕事をされていたのですか。

板東：港に入ってくる荷物の管理事務です。倉庫会社の下請けに荷役会社があって、海上の海運、陸上の通運がそこからおこなわれます。

今西：お母さんはどのような方ですか。

板東：母は姫路の生まれです。お城の御典医をしていた家系で、母方の祖父は警察官でした。武士の家などがそのまま警察官になったのですね。

今西：士族では廃藩置県でいったん失業して、そういう職業に就くことは多かったですね。

板東：母親の方は両親ともに早くに亡くなったこともあって、やはり兄弟と一緒に神戸に出てきました。神戸に出てくるタイピストや交換手に就くひとが多く、英語もできたようです。

今西：当時は「職業婦人」といいましたね。

板東：神戸には外国人や日系人の小さな貿易会社がたくさんありましたから、タイピストや交換手、営業事務のような女性の仕事は需要も多かったんです。

今西：板東さんご自身のお話に戻りますが、小学校はどちらに通われたのですか。

板東：摩耶小学校といます。いまもあります。この自宅から300メートルほどのところですよ。ここは、六甲山系で六甲山のすぐ隣にある摩耶山です。摩耶山は、お釈迦様のお母さんの摩耶夫人が祀られている忉利天上寺という名刹で有名ですよ。

今西：ご兄弟は何人おられるのですか。

板東：3人で、兄と姉が上にいます。

今西：小学校は、途中で国民学校に変わられた頃ですか。

板東：5年生の時に国民学校に変わりました。中学は当時の神戸一中、後の神戸高校に入りました。1947年に学制改革がありましたから、中学4年までは中学なんです。いわゆる四修（四年修了時）で旧制高校に入れなければ、五卒はありましたが、大学受験は不可で、結局新制高校の3年生になります。四修で入った人間は1年だけ旧制高校に通って、後は新制大学に編入になりました。もっとも、寮生活で遊び呆けるやつも多くて、だいたい語学でやられて落第すると、新制高校の3年生に戻されるんですよ。

私は中学4年の後、新制高校の2年生になり3年生で卒業しました。

2 神戸高校時代

今西：新制高校はどちらに行かれたのですか。

板東：神戸高校です。

今西：神戸一中が県立高校になってそのまま進まれたわけですか。

板東：そうです。一中と県一高女（第一神戸高等女学校）が一緒になって共学の高校になりました。ですから我々1930年生まれは、四修、五卒、新制高校三年卒で3回受験しているんですよ。四修で合格した人間はうまく進むと旧制大学にも行きました。

今西：新制大学組と旧制大学組とは違うとよく言われますよね。

板東：ぼくは神戸高校を卒業してから京大に入学しました。

今西：京大に入られたのは何年ですか。

板東：1950年です。朝鮮戦争がはじまった年です。ちょうど銭湯に入っていた時に開戦のニュースを聞きました。

今西：アジア・太平洋戦争では神戸も相当な被害に遭われましたよね。

板東：1945年の1月と2月は艦船を造っていた三菱重工と航空機を造っていた川崎重工、さらに5月11日に川西航空機が標的にされました。市街地のいわゆる絨毯爆撃は、3月11日の東京大空襲にはじまり、名古屋、大阪ときて3月17日が神戸です。これが市街地の最初の大爆撃で、その次が6月5日です。その後の大爆撃は8月6日です。

今西：ご自宅は大丈夫だったのですか。

板東：家は大丈夫でした。家の向かい側の筋まではやられましたが。これは8月です。向かい側の家の壁が真っ赤になって倒れるのを見て、山の方に逃げました。この時の空襲は西宮から来ましたから、まさか神戸までは来ないだろうとは思っていたのですが。芦屋など神戸の東部ばかりやられました。

今西：ご家族も大丈夫だったのですか。

板東：家族全員無事でした。3月17日の時は中学1年から2年になる春休みで、広島のみに近い田舎の親戚のところに遊びに行っていたんです。全然情報が入ってこなくて、18日に帰ってきたのですが、列車は明石で止められ、その後須磨まで動きました。神戸が焼けたとそこで聞いて、歩いて六甲まで帰りました。このあたりのことは今度出す本に書きました（前掲書）。これまであまり自分のことを書いてこなかったものですから。

今西：終戦の玉音放送はお聞きになられましたか。

板東：ここで聞きました。1944年にこの場所に引っ越してきました。それ以前は、もう少し南の方の摩耶小学校のすぐ側に住んでいましたので、開戦の知らせは前の家で聞きました。中学に入ったのも44年の4月です。

今西：敗戦の感想はどういうものでしたか。

板東：玉音放送の全体はよくわからず、「堪へ難きを堪へ忍び難きを忍び」というところだけはっきりと記憶に残ったものですから、まだ戦争が継続される

のではないかと思います。親に聞いて、負けたのかということがわかりましたけれども、玉音放送を聞いた段階では戦争が終わったという感想は持ちませんでした。その後大変だったのは、15日から、憲兵隊や在郷軍人が自転車で行き回って、負けたけど勝ったというような流言飛語が飛び交うのを押さえていたことですね。

今西：意識としては軍国少年でしたか。

板東：あまりそういう意識はありませんでした。父親があまりそういうのが好きではありませんでしたから。ヨーロッパやアメリカと貿易関係をやっている会社におりましたから、戦争がはじまった時点から、負けるに決まっていたと言っていました。親戚が三宮でレストランやバーをやっていたのですが、そのバーへ父親と一緒に行って、負けるなんて言うものですから、他の客と喧嘩になったりしました。そういう環境でしたから、あまり軍国少年にはならず、陸軍幼年学校に行く気も全くありませんでした。行くとすれば海兵（海軍兵学校）か海経（海軍経理学校）だろうと考えていました。陸軍幼年学校の雰囲気は好きになれませんでしたから。

今西：そうですね。

板東：京大の経済の上級生も海経出身の人間が多かったです。

今西：海経は競争率も相当高いでしたね。

板東：確かにそうですが、旧制高校に行くのも同じようなものでしたから。神戸一中は、当時の一般的な基準からすればスパルタ式だったとは思いませんが、新渡戸稲造の流れをくむ人間が創設したこともあって、北海道フロンティア精神の影響がありました。

今西：「開拓精神」ですか。

板東：さらに、イギリスのカレッジスタイルのクラス編成で、自治主義がとられて、生徒会が完全に全体を統率していました。もちろん教師が裏で動いているのですが、あくまで生徒会が服装検査等をやっていて、それが軍国主義的だと言われていました。確かにスパルタ的なところはありましたが、カレッジスタイルの自治主義で学生を鍛えるという両面があったわけです。これは、戦中

の校長だった池田多助さんの発想です。

今西：パブリックスクール的な校風ですね。

板東：そうです。1～4年生の各クラスには5年生が学年委員として張り付いて指導するという方式がとられていました。軍隊の初年兵方式ですね。それに、戦争中でしたが英語教育はとても盛んでした。

今西：英語は「敵性言語」だからやらないということではなく、しっかり教えていたんですか。

板東：重視されていました。校長はイギリス留学経験がありましたから、クラス編成も含めて、影響を受けていたのでしょう。ラグビーやサッカーも奨励されていました。生徒の中には、軍国主義でいじめられたという思いを持った者もおりますし、教師の体罰もありましたが、やはり両面あったのではないかと考えています。

今西：教師の体罰は普通にありましたからね。

板東：ぼくらが入学した時の4年生は予科練に行った人間が多かったのですが、戦後に復学して、クーデタのようなことを起こします。民主化が進む中で、まだ日本は負けていないということを言い出しましてね。われわれが自治会をつくるのに抵抗した。これを誰かがGHQに言ったのでしょう、ある日自授業をしていたら、CIE（民間情報教育局）が4～5台のジープに乗って学校にやってきました。まっすぐ校長室に入っていく、不穏な動きがある、と言って一発で4年生の動きを押さえてしまいました。

池田校長というのは、イギリス的なカレッジスタイルの学校を創ろうとする一方で、軍国主義的なところもある、という両面がありました。校長本人が英語が専門でしたから、英語の教師は影響力を持っていました。

今西：教師はどこかの大学の出身の人が多かったですか。

板東：高等師範学校出身が多かったですね。東京高師、それから東京文理大(旧制)。普通の大学出身よりは、高師系の出身者が多かったです。英語教師には留学経験者がおりました。神戸には、戦中にできた四中までありましたが、そのうち三中は自由主義的な伝統がありました。映画評論家の淀川長治なんか

出たところですよ。三中と一中が比べられて、三中が自由主義的で、一中がスパルタ的と言われたこともあります。ですが、やはり神戸という街の雰囲気がありますからね。

今西：貿易商人の街ですから。

板東：やはり国際的な雰囲気は一中にもありました。神戸には、まず白系ロシア人と言われた亡命ロシア人も大量に入ってきましたでしょう。

今西：パン屋なんかをやっていましたね。

板東：その後に入ってきたのがユダヤ人です。1936年の日独防共協定以前に、杉原千畝で有名なりトアニアなどから、満鉄を通して入ってきていました。防共協定以後はアメリカやオーストラリアに逃れることとなりますが。アタチュルク革命（1923年）後にはトルコからも多くの人が神戸にやって来ました。そういう人たちを我々は街中で普通に見るわけですよ。

今西：マルチエスニックな都市ですよ。私は京都ですが、やはり神戸は、エキゾチックでハイカラな街というイメージが強かったです。

板東：ですから、軍国主義とは馴染まない街なんですね。戦後に自治会ができるのも早かったです。

今西：高校生運動もあったんですか。

板東：ありました。自治会活動は戦後すぐにはじまり、教師との討論が行われました。戦前に、すぐに暴力をふるっていた教師たちは、まず教壇で謝りました。殴ったりして悪かったと、他にやりようもあったはずだが、申し訳ないと。良心的な人間はそうしてきちんと謝りましたが、口先だけで謝った教師は結局辞めていきましたね。

今西：教科書に墨を塗って使っておられましたか。

板東：墨を塗りながら、毎月新しい教科書が送られてきました。国語、歴史、生物等は、教師たちが昔自分が習ったノートを引っ張り出してきて授業するようになりました。歴史の先生はすぐにマルクスやロシア革命の話を、かなり正確にやるようになりました。生物の先生は進化論の話をしはじめましたし、国語の先生は日本語の言語学的な起源を、ウラル=アルタイ語族の話から授業す

るようになりました。民主化の華が一気に咲きました。その流れに乗って、我々も自治会を創設して議会を創ろうとしていたところに、予科練帰りのウルトラな上級生が戻ってきていささか揉めたわけです。戦前同様に生徒大会を開いて、戦争はまだ終わっていないとかやるんです。それが、CIEが入ってきて一気に押さえつけた。

教師との議論は、たとえば、教師から遅刻が多いという意見が出て、いや遅刻が多いのは授業がつまらないからだと言われて生徒が応酬する、といった内容でしたが、戦後1年間ぐらいは生徒の方が優勢だったように思います。

今西：教師は、敗戦前に言っていたことを全部くつがえさなければなりませんでしたから、信用を無くしますよね。

板東：戦中に運動場の下の方に防空壕を掘っていたのですが、よく殴る教師をふたりほど、そこでランチなんかもしましたよ。

今西：それはまだ、民主青年団等の運動とは結びついていなかったのですね。

板東：まだ結びついていないです。神戸一中は民青等の共産党系は少数派でした。知っている人間で3人ほどおりましたけれども、少なかったです。

3年生の時はこのように自治会を設立して、日本国憲法に対応するような議会を開いて勉強するという活動をよくやっていました。社会の先生で、授業中に模擬国会を開いたりするような人もおりました。4年生になると本格化していきます。ぼくは図書委員をやっていたのですが、すでに出来ていた民科（民主主義科学者協会）や歴研（歴史学研究会）から人を呼んで、図書館で自主講座を開いていました。

今西：民科はどここの民科ですか。神戸大学ですか。

板東：地域の民科です。その頃は多かったですよ。神戸大学からは後に学長になる経営学の古林喜楽さんが来てくれましたし、大阪経済大学の中村九一郎さん（社会思想）も呼びました。中村さんは東大の哲学を出て満鉄に勤めていました。歴史関係も何人か呼びました。当時は維新論争が盛んで、在野にも歴史家がたくさんおりました。

今西：姫路高校には、江口朴郎さん（西洋史、後に東大教授）のような偉い歴

史の先生もおられましたよね。

板東：ええ、姫高の先生も神戸に来て活動されていました。ぼくらがそういう活動をしていたところに、榎並公雄が出てくるんです。彼は三高を出て東大を受験したのですが落ちて浪人するんです。その間、図書館の司書としてアルバイトで神戸高校に来ていたんです。彼は神戸生まれですが、父親の商売の関係で上海で子供時代を過ごしました。中学は神戸一中で、父親は上海で商売を続けていましたから、寮生活をしていました。新制神戸高校の初代校長である高山忠雄は、それ以前に上海で外務省の調査官をしていた関係で知っていたのでしょう、高山校長の斡旋で榎並はアルバイトに来るのです。1年間で仲良くなりましたよ。そのころから彼は歴研で熱心に歴史の勉強をしていました。

今西：そうなんですか。

板東：あの頃は彼もニヒルな男でしたよ。マルクスについてなんかの議論と一緒にだいぶやって、いろいろ教えてもらいました。京大に入学したのは同じ年です。

教師の側も共産党系の人間がそれほど多いわけではありませんでしたが、二・一スト（1947年）の時は周りも高揚していましたから、教師も前日に壇上に立って、明日からストに入ること、なぜストに入るのかを説明しました。そういう周囲の高揚した民主化の雰囲気には我々も影響されました。その意味で左翼傾向はありましたが、生徒の中で明確に共産党に属していたのは先ほども申しましたように少数でした。

今西：榎並さんはどうだったんですか。

板東：彼も当時は無党派です。民科のシンパではありましたが、歴研で歴史の勉強ばかりやっていたから。盛んだった明治維新論争では、ぼくも服部之総や奈良本辰也が好きで勉強しました。

二・一ストの後はいわゆる逆コースになります。

今西：二・一ストの挫折ですね。

板東：挫折の中の沈滞ムードがある一方で、共産党は極左化していく傾向にありました。また、大衆的民主化の流れはさほど後退していません。1948年とい

う年は、公務員のストライキ禁止など逆コースがはじまる一方、中国では共産党の優勢が明らかになってきました。このように状況が複雑になってきましたから、我々も運動の方針について反省の必要を感じていました。運動の指導部も、共産党自体も内部はガタガタだったと思います。そして49年にレッドパーズがはじまる。ここでいまだに複雑で興味を覚えるのは、レッドパーズと1950年のコミンフォルム声明は共通しているわけですね。

今西：コミンフォルムの野坂参三批判ですね。

板東：外部からの攻撃と内部分裂が同時に起こるわけです。その頃強かったのはやはり若い世代でした。我々から見れば、レッドパーズを止めたのは、後に全学連を創る全高連にいた旧制高校の人たちでした。ですから、大学に関してだけはレッドパーズは止まりました。もちろんそれ以外は朝日新聞をはじめ、あらゆるところがやられました。

今西：映画界もそうですね。

板東：新聞、映画、鉄鋼も。

今西：小学校の教員なども多数やられましたね。

板東：至るところでやられた。この時の共産党は無力というか、浮いていたね。浮いていたのと同時に、分裂が同時に起こるんですね。ですから、スパイが陽動したとも思われる傾向があったわけです。それにしても複雑ですね。ですが、1948年というのは民主化運動としてはまだ高揚期だったですね。労働運動では民同（産別民主化同盟）が出てきます。民同は、当初は正常な運動です。共産党が介入してくるのに抵抗していましたから。そうしたわけで、民主化運動は当時まだ各拠点で力を持っていたんですね。

今西：ですから、二・一ストの後で共産党が分裂しなければ歴史は変わっていたでしょうね。

板東：そうですね。我々は、シンパというか、左翼をなんとか盛り立てるような民主化の運動をやっていました。それが、組織としての共産党はその後一気に力がおちてしまう。

今西：指導部が地下に潜ってしまいますからね。

板東：あの頃は、闘争で占領軍に捕まると沖繩送りでした。当時の占領軍の中には夜間に強姦等をする者もおりまして、企業や住民は自衛の手段を講じていました。そして、アメリカ占領軍の告発がいくつかの場所で行われるんです。共産党がそんなことをしたらすぐに目を付けられて潰されるに決まっていますが、榎並たちはそのピラを撒いて捕まりそうになったんですよ。

今西：それは何年のことですか。

板東：49年です。榎並は共産党に入るか入らないかぐらいの時期でしたが、おそらく地区委員会からピラを撒くように指示されたのでしょ、他に黨員だった神戸高校生ふたりほどと一緒にやったんです。それで榎並はあやうく沖繩送りになりそうになったんです。実践的活動をはじめてすぐにそんな事態になってしまったわけで、その後はしばらく彼も沈んでいましたよ。

今西：榎並さんは捕まったんですか。

板東：いや、捕まるまではいいないはずですよ。

今西：確かに、当時は捕まったら終わりですからね。京大生だった小野信爾さん（中国史家、花園大学名誉教授）も、沖繩送りにはなりませんでしたが、GHQの軍事裁判で山科刑務所に服役させられていますからね。

板東：ですが、榎並たちのような告発の動きが全国で多発するんです。おそらく、戦線縮小を余儀なくされていた共産党が強硬手段に打って出たということなのでしょう。榎並はその後いったん実践から離れて、我々と一緒に読書会などをしていました。

今西：マルクスとかを一緒に読んでおられたわけですか。

板東：読みました。系統的な読書ではありませんでしたが。

3 京都大学経済学部へ

今西：京大に入学されたのが1950年ですと、宇治分校ですか。

板東：そうです、最初の宇治分校です。砂漠みたいところで、青大将や蛙がよく出て、女の子が蛇を怖がるから、その対策が自治会の運動のひとつになったりしてね。当時は、学生の種別が8種類ぐらいあるわけですよ、軍隊帰りやら、

旧制高校を辞めた人間やら。

今西：年齢もばらばらですよ。

板東：そう、上は25歳ぐらいからいました。我々のような新制高校型は学生運動を直接目の当たりにはしていませんが、旧制高校にいた人間はその洗礼を受けていますから動きが早かったですよ。入学してすぐ彼らが中心になって自治会運動がはじまりました。1年目の自治会は旧制高校組で占められていました。

今西：中心になったのは三高グループですか。

板東：三高と六高ですね。五高は数が少なかったです。松江高校、松山高校からも何人か入っていましたね。

今西：浪速高校グループもいましたか。

板東：浪高グループもいました。それから山口高校ですね。

今西：入られたのは経済学部ですよ。一緒に入られたのはどなたですか。池上惇さん（京都大学名誉教授）は同期ですか。

板東：池上はほくより2年下です。田中雄三（龍谷大学名誉教授）も2年下で、尾崎芳治（京都大学名誉教授）が1年下です。

今西：日本史ですと、江口圭一さん（愛知大学名誉教授）や戸田芳実さん（神戸大学名誉教授）、中村哲さん（京都大学名誉教授）あたりですね。

板東：江口は一緒でしたね。だいたい皆2回生までは真面目にやって、3回生ぐらいになると出てこなくなるのですが、我々新制高校組は後発でしたから、2回生になって以降、ちょうど天皇事件（1951年）の頃にやっと台頭してきます。

今西：中塚明さん（日本史家、奈良女子大学名誉教授）はずっと運動されてましたよね。

板東：ええ、やっていました。

今西：でも板東さんが入学された頃の中塚さんはちょうど京大前進座事件（1950年）で処分されていた時期ですね。同学会の副委員長でしたから。

板東：ほくらのクラスは文学青年が多くて、先ごろ亡くなった三高出身の小松左京（作家）や、高橋和巳（中国文学者、作家）もいました。彼らも2回生ま

では左翼ですよ。3回生になると少し様子が変わってきます。

今西：入学された前年（1949年）に京大病院事件が起こっていますよね。それは全然見ておられないわけですか。

板東：あまり知りません。ぼくらが入ったのは民統（全京都民主戦線統一会議）の結成期なんですよ。入学してすぐに、蜷川虎三（京都府知事）、高山義三（京都市長）、大山郁夫（参議院議員）の選挙がありましたから。

今西：学生組織にも民統があったのですよね。自治会組織の立候補も民統から出ていますね。

板東：そうです。ですが、そういう形態でやっていたのは吉田分校の方で、宇治分校には及んでいません。ある程度の影響はありましたが。高山・大山の選挙も、手伝ってくれと言われてやった程度です。

今西：小野一郎さん（経済学者、立命館大学名誉教授）も同じくらいですか。

板東：小野は2年下です。年齢は上ですが。彼は広島出身でね。

今西：被曝されてますよね。

板東：それに、入学前に2年ほど進駐軍に勤めていたんですよ。それで英語ができたんです。そういう経緯があったので、自治会に彼が入ろうとした時には警戒論がありました。彼には高校時代の友人もいませんでしたし、年齢はぼくよりも2歳上ですから。素性がはっきりしない大人という感じで、最初は周りも皆近づこうとはしませんでした。2学年下の人間からも、どうしたものかと相談を受けたりしました。様子を見てみると、真面目にやっていますが、おとなしいですし、また少し世間知らずなところがあって、気味の悪い男だなという印象がありました。実際、当時はスパイのような人間がおりましたから。党内で摘発された人間もいます。

4 学生運動—京大天皇事件

今西：松浦玲さん（日本史家）は同期になられるんですか。

板東：松浦は1年下です。

今西：生まれは同じ1931年ですよ。

板東：そうでしたか。彼は、広島の校長先生の息子でね。

今西：荒神橋事件（1953年）で放校にされてしまいますが。

板東：あの時は、松浦とぼくと小野、荒木和夫（元三一書房社長）と一緒に処分されたんです。松浦だけが放校で、残りのぼくらは停学でした。ぼくらは3人とも経済なんですよね。一方で、松浦の文学部は、左翼だというだけで拒否反応を示すような教授がいっぱいおりますから。経済学部の教授会は、学生の処分は軽くしようというところでまとまるのですが。

今西：経済学部は学生をかばったけれども、文学部はかばってくれないと言われてますよね。

板東：松浦は大変いい男なんですけど、行動が少し粗放でね（笑）。同学会の会議の最中も机の上に足を乗せてしゃべっているし、教授としゃべる時も、もう少し言葉遣いを丁寧すればいいものを、とっておりました。そういうところで少し損をした面があります。

今西：天皇事件の時は直接運動に関わられておられたのですか。

板東：ぼくはその頃から積極的に関わるようになるんです。吉田分校の自治会の委員でしたから。吉田分校の方針を掲げた掲示を持って行ったグループです。

今西：あの天皇批判の掲示をやられていたのですか。

板東：吉田に行ってから、宇治の頃よりは自治会もスムーズに動くようになっていました。

今西：天皇事件から積極的に関わるようになられたのですね。

板東：そうです、2回生で吉田分校の自治会になってからです。ぼくが学生運動に積極的に関わるようになったのは、やはり榎並の誘いが大きかった。

今西：榎並さんのオルグだったんですね。天皇事件の前の原爆展（1951年）には関わっておられるのですか。

板東：その頃は、吉田に移ったばかりでほとんど1回生でしたから、あまり関わっていません。中岡哲郎（技術史家、大阪市立大学名誉教授）たちの仕事です。彼は旧制高校（三高）出身ですから、ぼくより早く吉田におりました。

今西：原爆展で中心になったのは青木宏（当時京都大学同学会委員長）ですよ

ね。

板東：そう、他には医学部の安藤や川合（一良）なども関わっていました。原爆展は、学生運動としては非常にプロ的かつ職人的なレベルの高いものでした。理学部の人間は職人的ですし、医学部は3回生ともなるとほぼプロの医者ですから。

今西：川合一良さん（元京都南病院院長）が深く関わっておられましたね。

板東：そうです、川合のことはよく知っています。彼らは、自分の学問に生かそうという意識が非常に高かった。技術的にもかなりのもので、機材等もしっかりしたものを使っていました。

今西：原爆展は非常に評価が高いですね。近鉄百貨店で3万人近い人を集めたわけですから。

板東：それだけのものであったから、天皇事件もあれだけの広がりを持ったという面もあったと思います。天皇事件に共産党がどこまで関わっていたか、ということは率直に言ってよくわかりません。わかる人はほとんどいないと思います。おそらく、ビューローから何らかの指示があったという程度で、運動の形の決定までは関わっていないはずです。

今西：個々の党員が各自で関わったということはあったでしょうけどね。

板東：とにかく我々は、「平和を守れ」の歌でお迎えしようとか、吉田分校で看板を出すだとか、中岡の公開質問状だとか、各学部ことの方針も含めて、いろいろな形でお迎えしようという考えでした。もっとも、背後で組織化した人間がいたとは思いますが。

今西：中岡さんに公開質問状を書かせたのは榎並さんですよ。

板東：そうです、あのふたりは三高グループですから。やはり三高グループというのは、他の旧制高校グループと比べても、知的に動こうとするんです。公開質問状で迎えようという発想は三高グループ的な発想です。

今西：中岡さんは、質問状が大騒ぎになったことで大変な恐怖を感じて、その後学校には行かなかったようですね。

板東：彼は、学生運動を積極的にやるというタイプの人間ではありませんでし

た。ぼくが府学連や関西学連で運動をやっていた時も、彼はその側で『学園評論』を売り、次の執筆者を探すといことをもっぱらやっていた。そういう文人タイプの人間です。演説は苦手だからぼくらに頼むとかね。

今西：小畑哲雄さん（当時京都大学同学会委員）はアジテーターだったそうですね。

板東：小畑も変わり者で、彼は旧制高校（五高）を卒業した後、党活動をしてから、京大に臨時編入してきたんです。五高の時からプロ的活動家でした。ですから、京大に入ってきてすぐにトップ級の活動家と行動をともにしていました。

今西：青木宏さんはどうですか。

板東：青木というのは特別研究生で、将来大学に残るはずの人間でした。

今西：大学教授になるはずの人だったそうですね。

板東：非常にソフトな人間で、学生運動のリーダーには向いているけれども、党活動家になるような人間ではなかった。学生運動家と党活動家というのは、見た目やセンスも違います。議論をしても発想が違う。ぼくらは大衆運動としての展開ということを考えるけれども、彼らは党の方針をまず第一に考える。京大の中ではぼくらの議論の方が優勢でした。もっとも、農村工作とか労働者工作とか、あるいは火炎瓶とかね、そういうぎりぎりの闘争になるとやはり彼らにはかなわない。

今西：軍事組織のYとかですね。

板東：ええ。あのYというのは突如として出てきましてね。よくわからない組織ですが、上から任務が与えられて、特別な人間を選んで、特選隊として行動していきますね。

5 破防法反対闘争とY

今西：天皇事件の後に同学会は解散させられますよね。

板東：それは、ぼくは関係していないんです。ぼくは府学連の委員長になりますが、府学連というのは各学部の自治会で選出されて、府学連の代議員会で決

まることですから、同学会とは関係ないんです。府学連も榎並に頼られました。

今西：同学会解散の後、再建のために学園復興会議がおこなわれますが、その流れの中ではどうされていたんですか。

板東：学園復興会議は、ぼくが府学連委員長をやった後の話です。府学連委員長をやったのは1952年、学園復興会議は53年の11月ですから。

ぼくはなかなか党员にはならなかったんです。当時、党员候補というのがありました。3カ月間ほどですが、一緒に運動をしていくのに、それにもならなければ話にならないということで、まず党员候補になりました。ただ党には、Yの問題をはじめ、いろいろ疑問を持っていました。

今西：52年頃は火炎瓶闘争がかなり激しかった時期ですよ。

板東：激しかったですね。

今西：その頃には党员になっておられたのですか。

板東：なっていました。いろいろ考えはありましたが、他所で方針がきめられて自治会にもってこられるというスタンスが面白くなかった。ならざるを得なくなって、52年の5月頃に入党しました。

今西：じゃあ、天皇事件も関わっておられたのですよね。

板東：前進座事件以降、運動は実際のところ沈滞していました。それが原爆展の盛り上がりがあって、天皇事件になります。51年11月です。天皇事件が、フレームアップされそうなので、全国へ真相を知らせようということになった。

今西：それが帰郷運動につながるわけですか。

板東：そうです、帰郷運動のはじまりです。その時はまだ帰郷運動とは呼んでいませんでした。遊説隊です。2～3人でひとつのグループを作って、北は東北大を中心にして、北海道にも3グループほど、東京にも4～5グループ送りました。ぼく自身は東京に行ってくれということになりました。各大学から招待を受けて遊説して回りました。

今西：その頃の全学連の指導部は国際派ですよ。それに武井昭夫グループですよ。

板東：そう、一方京都は所感派です。もちろんそのこと自体はある程度知って

いましたけれども、実際の中身のことはよくわかっていませんでした。それで遊説に出かけた目的はむしろ、所感派による各自治会のテコ入れです、つまり京大の人間が行って所感派にオルグしろと。実際に演説に行ってから事情が呑み込めてきました。東京は都学連が全部仕切っていました。広い運動場の地下に事務局があって、奥の方に全学連、手前側に都学連の事務局があるんです。ですから、全学連に行くには都学連の前を通らなければいけない。都学連と全学連は大喧嘩の最中でしたからね。ぼくらは都学連の手配で各大学を回りました。各大学ではそれぞれの自治会が組織しています。東京には1カ月ほどおりました。天皇事件というのは何も悪いことをしたわけではない、という話をしてみるのでありますが、同時に、党の東京都委員会としては所感派の勢力を強化したいという思惑があるわけです。

今西：国際派から所感派に主導権を移そうということですね。

板東：全学連を追い出すための都学連大会にも出席しました。

今西：全学連の委員長を玉井仁さんにして、第5回全学連大会の時に、立命館大学の地下室で所感派が武井グループを追い出そうとした国際派へのリンチ事件がありますよね。

板東：それは、ぼくが東京から戻った直後です。52年の6月のことですね。

今西：じゃあ、直接は関わっておられないのですか。

板東：関わっていません。あったことも知りませんでした。その後、府学連委員長として、関西学連の中の国際派を追い出すための喧嘩はやりました。国際派は立命館等あちこちにおりましたから。

今西：立命館にもいましたね、竹村民郎（日本史家、元大阪産業大学教授）とか。大阪大学でも、長谷川慶太郎さん（経済評論家）がそうでしたね。

板東：東京遊説でのもうひとつ重要な活動は学者を口説きに行くことでした。南原繁（政治学者、元東大総長）、高島善哉（経済学者、元一橋大学教授）、上原専録（歴史家、元一橋大学教授）先生らのところに行きました。演説は、全部で20校ほど回ったと思います。早稲田にも行きましたが、あそこはいろいろ分かれていますから。

今西：早稲田は諸派入り乱れていましたね。国際派の中でも分裂がありましたから。

板東：ですから、中央線沿線の大学を回ることが多かったですね。一橋や東京経済、津田塾のような。右翼が強い大学もありましたが、何とか話を聞いてくれと演説してまわりました。

今西：表向きは天皇事件の説明だったのですよね。

板東：表向きはそうです。我々は何も悪いことはしていないから支持してくれ、ということで。ですが、例えば津田塾なんかは、細胞の再建に行ったようなものです。

今西：府学連の委員長をされていた当時の書記長は誰だったのですか。

板東：同志社の人間でした。各大学から共同で三役を出すのです。

今西：京大・同志社・立命ですね。

板東：事務局は同志社の学友会に置いていました。

今西：事務局は同志社に置かれることが多かったですね。

板東：同志社の学長や学生部長とはツーカーの仲になっていましたから、学園復興会議の時も、京大法経一番教室が駄目になった時のために同志社の明德館を借りることができたんです。立命館とも同様でした。細野さんとかね。

今西：社会学者の細野武男さんですね、後に立命館の総長になった。

板東：細野さんは、立命に行く前は兵庫県立労働研究所にいたんです。ほくは社会調査のようなことをよくやっていた関係で、そういう知り合いが多かったのです。

全学連の中央執行委員のような幹部になると、だいたいの人間は2～3カ月で辞めて帰って来てしまうんです。耐えきれなくなって。ほくはあまり強い人間ではありませんが、そういうのは割と平気でした。共産党に対しても、一貫して自説を曲げなかった。3カ月に1度、東京で共産党の全国学生グループ会議がありました。たとえば、小河内ダムの農民を救えと闘争に行っても、皆やられて帰ってくるでしょう。

今西：小河内にも行かれたのですか。

板東：行ってはいません。ですが、会議で議題になるわけです。小河内に行くのはYの部隊だったりするわけですが、そういう運動では駄目だとほくは言い続けた。あくまで大衆運動として、大衆の要求を実現するために、大衆がいかに活動できるかを第一に考えるべきだと一貫して主張しました。これが中央の気に入らないわけです。当時関西にあった中央ビューローに連絡がいくのですね、あいつは偏向していると。関西のビューローには志田重男がいましたから。

今西：志田さんが学生運動を指導していたのですか。

板東：彼は、徳田球一後の非合法活動の全国のトップでした。彼の下に、労対、青対と一緒に活動する学対があったわけです。

今西：中央の青学対は誰が指導していたのですか。

板東：よくわかりません、しょっちゅう代わっていましたから。

今西：関西ではどうだったんですか。

板東：だいたい大阪市大出身者が指導していました。これは私の意見とほとんど同じですから。

今西：水口春喜さん（後に日本共産党中央委員）とは違うのですか。

板東：彼は府委員会でしたが、学対には関わっていませんでした。京大関連のことがある時には出てきましたが。いろいろな立場の人間がいても、わいわいやっているうちに話がまとまるのが京都ですが、一方東京は、共産党もやはり官僚的なんですよ。当時、東京に行く時には、京都駅から車内に乗り込むまではボディガードを付けていました。夜行列車に乗って東京に向かい、駒場(東大)の寮に行って会議をするんです。しかし、まったく中身の無い会議でした。関西で議論している方が余程いい。

その頃の運動は地べたを這うようなものでした。自治会なども相当潰されていましたから。北海道と九州はまだよかったです、東京も国際派との間で喧嘩していますし。

今西：京都の火炎瓶闘争にはタッチしておられないのですか。

板東：瓶は一切拒否していた。そんなところに立ちたくはない。

あの頃、地方から出てきて共産党に入るのは、太宰治ではないですが、没落

地主の子どもが多かったんです。だから身分意識が高かった。経済的には大変貧しいですが、出世主義なんですね。そういう地方出身者が傾向的に多く、私の感想では、共産党内での出世主義もそれと関連していると思う。

今西：エリート意識は非常に高いんですね。

板東：だから、実際の運動ではあまりもたない。すぐに挫折してしまうんです。ぼくらのような都市型インテリはライフスタイルからして違う。タバコも向こうは新生でこっちはピースだったりね。

今西：それはプチブル的ですね（笑）。

板東：どっちがプチブルだかわからない。だから、地方出身者主導の運動には、ある種の貧乏臭さが付きまとう。中身はまったく違うのに、表面的にはプロレタリアを気取って、それを見せたがるんです。そういう傾向を持った人間が、六全協（1955年）の後に大学にたくさん戻ってきた。つまり、党の専従になって地区委員等をやっていた人間や、山村工作隊に行っていた人間が大学に戻ってきたわけです。活動中に自殺したような人間も、特にYの中には若干おりましたが。戻ってきた者の中には入学金を払っていないような者もいて、数十人の復学を大学側と折衝しました。

今西：戻してくれたんですか。

板東：戻してくれましたね。

今西：荒神橋事件のことに話を戻させてください。私がいちばん不思議だったのは、学園復興会議が同志社で成功しているのに、一方で同時に京大法経一番教室を使わせろという集会をやっているわけですね。松浦玲さんがそこで中心だったと言われている。

板東：松浦の件は、それが誰の意見が知りませんが、ぼくにはちょっと信じ難いことです。松浦とぼくは一貫して一緒に行動して、同窓会役員としては法経第一教室抗議闘争にはかかわらなかった。

今西：たとえば、上田篤さん（建築学者、京都精華大学名誉教授）の見解では、Yの挑発行動に松浦さんが乗ったのでは、ということなののですが。

板東：上田がそんなことを言っていましたか。東京の運動はよく書かれますが、

京大中心の西の運動はあまり表に出ない。だからぼくは谷間の運動とよく言っているのですが。だから、いいことをやっても全く評価されない。Yのことがよくわからないのは、そういう側面もあります。もちろん、Yについては皆も表に出したがるということもあります。運動にとって役に立ったのならまだしも、党の官僚主義を助長するようなことはしたくない。

ぼくが府学連委員長になった1952年は、メーデーの後に破防法闘争があります。

今西：破防法闘争では、豊田善次さん（『高橋和巳の回想』の著者、当時京大文学部学友会委員長）をはじめ何人が処分された方もいらっしゃいますよね。

板東：ストライキをやりましたが、ストをやると各学部の議長と委員長は自動的に3カ月の停学です。軽ければ譴責で済みますが、いずれにせよ処分されることになっていました。さらに破防法闘争では、総評（日本労働組合総評議会）等とも一緒に大動員をかけて京都駅前で大カンパニアをやります。この時にはYもすでにできています。メーデーでもそうでしたが、こうした集会をやる時には我々が学生代表として届出を出します。表向きは責任者になるわけです。党の非合法的な部分は表には出てこない。ですから、逮捕状も我々に対して出されるのです。そういうことが多々ありました。確かに仕方がない面はあるのですが。メーデーではうまくやりました。総評も、我々に対して警戒心は持っていましたが、話し合っただけでなんとかがやった。そこで6月に京都駅まで大集会をやるということになりました。2万人近く集まったと思います。ぼくらが壇上で上から見てみると、どこに私服（警官）がいて、どこにYがいて、というのはわかるんです。ぼくらの話に対する反応の仕方で。見ていて、今日はまずいと。つまり、Yが勝手に行動しそうだという雰囲気が見て取れました。米田（豊昭、当時全学連委員長）はそういうことに敏感な男でしたから、情報を回していました。人もたくさん集まり、カンパニアとしては大成功でした。それでぼくが、「本日は大成功であった、学生は解散、それぞれ隊を整えて帰れ」と演説が終わってから言った。そうしたらYが、「国鉄の労働者激励のために突っ込む」と言い出すわけです。すぐそこに私服がおるのに。こういう挑発に立

命館に多いYは割と乗りやすいんです。同志社にもYが少しいましたから、やはり挑発に乗るんです。同志社の人間も立命の人間も知っていましたから、「帰れ」と上からやるわけです。京都駅の中に突っ込んでいったら、どんなことになるかわからないですよ。こちらは「大成功であった、解散」と何度も言い続けなければならない。それでも立命のYなんかは行こうとするわけです。そういうことが何度もありました。1952年という年は小河内ダムの闘争もありましたし、山村工作隊も駄目で、運動はガタガタになっていました。工作隊にはほくも6人ほど連れて行きました。しかし、実際の工作隊の体をなさないですよ。学習会の一種です。

今西：どちらに行かれたんですか。

板東：京都の桑田です。

今西：北桑田郡と南桑田郡ですね。

板東：あの辺りは（被差別）部落が大変多いところです。ぼくがキャップにならざるを得なくて、6人ほど選抜して出かけました。農村調査団だという名目で村に入ります。もちろん、共産党の拠点ができている村もありますから、そういう村ではすんなり受け入れてもらえます。ですが、何も無いところでは、それこそ泊まる宿もない。寝るところを探し回って、40分ほどかけて登る山の上に禅寺があったので、何とか泊めてもらえませんか、縁の下でもいいから貸してもらえませんか、と交渉しても駄目で、結局その寺の和尚と一緒に山を下りて、和尚が宿屋と交渉してくれたりということもありました。とにかく、相手が全く応対もしてくれないということがあるわけです。そうすると、一緒に来ている人間には動揺が起ころはじめます。帰りた、と言いつすんですね。そういうのをなだめながら紙芝居をさせたりするんです。京大だけでなく、龍谷大学のようなところでも、共産党が学生をあちこちに連れ出していろいろやらせるわけですから、組織は当然ガタガタになるんです。

そこで、破防法闘争の後、組織転換の意図もあって、西日本学生生活改善会議というのを私が府学連として提案した。西日本の学生を全体に集めて。その意味では、ぼくが委員長をしていた府学連は、事実上、西日本の学生にとって

の全学連的な機能を果たしていたんです。そして、こういうテーマだと学生も集まりやすいし、実際集まってみると、やはり学生同士というのはいいものだし、と思うわけです。同じ52年には、西日本平和会議というのもやりました。このように、非合法ではなく、全学連と別個に（全学連にそんな機能はなく）、共産党の下請ばかりやらされた学生自治会が、弱体化したんです。あくまで合法的に、できるだけ学生同士が交流し合えるような運動の形態を演出することに苦労しました。

その後、京大のわれわれ学生7～8人で集まって、学生運動とは何か、これからどのような運動をしていけばいいのか、という根本的な問題を徹底的に議論しました。上田なども入った、それが学園復興会議の提案です。京大と府学連が全学連をそのように動かした。2度と学生自治会を破滅させない運動をつくろうということでした。これは共産党の指導への暗黙の抵抗だった。「暗黙の」ということは、正面きって共産党と喧嘩できないからです。

確かに荒神橋事件後、1カ月間で18回ほどデモに出ました。われわれのデモの先頭に立ってYが防衛してくれるのですが、何をするか危なくてしょうがない。それでも、ぼくが止めればYも言うことを聞くんです。代わる代わるリーダーを出して組織をして、1カ月で20回はデモをやりました。そういこうことが1年近く続くのですが、その間続けた議論の結果出た結論は、やはり学問の自由と学園の自治、これを突き詰めるべきではないか、ということでした。労働者に奉仕する階級闘争ということではなく、学生運動は学生層のための運動である、ということを明確にするということです。こういうことを共産党の会議で主張すると、日和見だと言われるのですが。

それでも、やはり学生のための学生運動だということで、ぼくが提案したのは、何よりもまず学問の自由が先決だと考えて、全国学生ゼミナール会議をやるということでした。学科別に集まって学問の中身について話をし、学問のあり方はどうあるべきか、ということを議論しようということを提案し、組織していきます。ぼくは全学連の中執でもありました。すると東京の人間が、「ゼミナール会議」などではなく「学科別会議」にしろ、と言ってくる。「学科」

などというせせこましい話ではなくて、あくまで「ゼミナール」という名称にすることで、学問の中身自体を議論しようという意図を込めていました。結局、中央執行委員会は「ゼミナール」のままで通しました。そうした運動を続けながら、学園同士の交流を深め、学園の自治と学問条件を整えるために運動するという考えが、学園復興会議であったはずで。

学園復興会議に話をもちますと、1957年から58年にかけて、全学連は組織的にも理論的にも窮地に陥っていました。どこに行け、あそこの労働者のところに行け、と中央の言うことばかり聞いて、ビックリマークだらけの新聞ばかり出して、そういうことではいかん、と思いました。そこで、58年の中央委員会を京都で開くことにしました。やるならば国立大学の中心部でと、京大の楽友会館を借りて開きました。楽友会館には独立した理事会があって、利用申請をする時には、当時理事だった堀江保蔵教授（日本経済史、京都大学名誉教授）に頼みました。

今西：堀江さんというのは保守的な方でしたよね。

板東：保守的でしたが、いい人でした。申請する時は経済学部で使うと言って頼んで許可されたのですが、後で中央委員会だということがわかって、やはりいかん、ということになった。それで堀江さんの家まで交渉に行きました。ですが、中に入れてくれない。そうしたら、堀江さんの奥さん、この人は本庄栄治郎さん（日本経済史、京都大学名誉教授）の娘なのですが、せっかく学生さんが来ているのに部屋にぐらい入れなさい、と言ってきて、どうにか交渉して許可してもらいました。これで国立大学の、京都大学に橋頭堡を確保したという意味で、大きなことでした。

この後に全学連の全国大会を同志社でやることになりました。学園復興会議を控えていて、ここで委員長を京都から出さなければ、復興会議も東京の言いなりになってしまうということで、やはりここは米田（豊昭、後に都市科学研究所）に、と委員長になってもらいました。ぼくは、大学との関係も話し合い重視の、あくまでソフト路線でしたから、全国大会の時も、運動の最中でドロドロになって夜行で京都に集まってくる学生達を集めて、同志社の側にある銭

湯を借り切って、まず全員風呂に入らせました。さっぱりさせたところで、朝9時半からの大会をはじめたわけです。

6 学園復興会議と荒神橋事件

今西：学園復興会議の時の府学連委員長は大島渚さん（映画監督）ですか。

板東：準備段階ではまだほくです。準備が整ってから大島に移しました。それで上田と組んでいたのです。ですから、復興会議自体は大島と上田篤がやった。それで、京大同学会が再建されて選挙があり、ほくは同学会に戻ります。就職や大学院への進学を考える時期だったのですが、状況を見ていて、やらざるを得ないと思って引き受けました。

今西：府学連の委員長は小野一郎さんですよ。

板東：小野が委員長で、ほくが副委員長です。松浦玲が総務部長。

今西：荒木和夫さんはどうされたんですか。

板東：荒木は党のキャップでした。

今西：荒木さんは同学会委員には入っていないのですか。

板東：入っていません。彼は党のキャップ、つまり裏に回っていて表には出て来ません。京大の共産党というのはひとつの都市位の勢力がありました。

今西：でも、荒木さんも処分されていますよね。

板東：それなんです。実は、簡単に言うと、あの時は党が表に出てきた。このことも今日は話します。我々としては法経第一教室でやるのが悲願であるから、法経第一の使用を申請する。ですが、困難であることはわかっていたし、全国から集まってくる人達を怪我させるわけにもいかない。そこで前の晩に、百万遍で共産党の会議をやりました。京都府委員会も中央ビューローも来ていた。彼らが、学園復興会議とはいっても壊れた壁を直せとかいう話ばかりで、肝心の権利闘争を忘れていたのではないかと、言ってくるわけですよ。大激論になった。党の言い分を全否定するわけにもいきませんから、法経一番教室の前に学生を集めるだけは集めて、そこでの行動は徹底させて、実際の会場は他に譲るという方針に決まりました。もちろん、同志社も立命も押さえてありますから。

立命の場合も末川さん（博，民法学者，当時立命館大学総長）に頭を下げて。末川さんとはそれ以前から通じていましたが，この時は，末川さんから「今度はひとつやれよ」と言われました。

それで同学会が再建されるのですが，天皇事件の時は同学会が先頭に立った結果，潰されたわけです。今度は潰すわけにはいかない。そこで，小野，板東，松浦は前面から引くということにした。復興会議は同学会が主催しているのでは全くなく，全国から集まった同志諸君がやっているという名目にしたんです。そこで先頭に立ったのが京大の党だったわけです。中心になっていたのは金田というぼくと同学年の男で，彼は同学会とは無関係の人物です。荒木は一切表には出て来ずに，裏で連絡を取っていた。ぼくらは，極端な言い方をすれば，屋根の上で寝そべっていただけです。一切表には出るな，出たらまた同学会が潰される，と。

今西：ですが，集会届を出した責任者は松浦さんだったのですよね。

板東：それは，あくまで法経第一教室での集会届，というだけのことなんです。時計台前の集会届とは別問題です，論理的には。

今西：第一教室は使われてませんよね。

板東：実際には使われなかったのだから，そこでの集会届は無関係なわけです。それが裁判でも問題になりました。ぼくはレポを出しながら様子を見ていました。立命館に移動することになって，荒神橋を渡ろうとしたところで，荒神橋の向こう側にパトカーがいたんです。後ろからもパトカーが来た。ぼくらがいたら，そんなことにはならなかった。絶対にそこで解散していた。ですが，現場にいた連中は慣れていないものだから，真中で押し合いになって，橋から落ちたんです。7人落ちて日赤病院に運ばれた。ぼくらは自転車で駆け付けました。

一方で，大島委員長と上田書記長がやっている立命館での会議はうまくいっていました。前芝確三さん（政治学者，元立命館大学教授），奈良本辰也さん（日本史家，元立命館大学教授）も出て来てね。

今西：奈良本さんは，あまり騒ぎ立てるな，というようなことを言ったようで

すね。

板東：内容のある会議をしなさい、ということです。とにかく、こちらはうまくいっていました。その後で、府警に行こうということになった。この動きを上田は止めようとしたはずです。

今西：上田さんが言うには、全部が行ったわけではなく、かなり左の分子が行ったということですが。

板東：上田は止めたんです。奈良本さんも前芝さんも止めた。止めたことによって、Yが上田達に逮捕状を出したんです。ぼくらはその時、日赤に収容された患者を、逮捕されないように移動させていました。それは前年のメーデー事件で、皇居前広場でけがをして病院に収容された連中が、即刻逮捕されたという例があったので、公共病院では危ないと感じたからです。その後府警に駆け付けた時には、ほぼ片付いた後でした。一旦立命館に戻りましたが、ぼくらにも警察から逮捕状が出るかもしれないということで、車を飛ばして京大に戻りました。学生は大学の中に入れば治外法権みたいなものでしたから。これがいきさつです。同学会は表に立たず、京大ではあくまで抗議活動に止め、中身のある会議は立命でやる、という方針で進めたわけですが、一方で府警に行こうと動いたYと上田はもめたんです。

今西：Yでは医学部薬学科の小山（泰正）という人が煽動したそうですね。

板東：東邦大学の教授（現名誉教授）になった人間です。彼も生真面目でいい男なんですが、党から言われると仕方ないんですよ。

今西：府警に抗議に行ったのは一部だったのですか。

板東：いや、大部分が行った。大衆運動ですから、行こうとなったら皆行ってしまうんです。上田が止めたりしたわけですが、やはりそこが大衆運動の難しいところですね。

今西：府警でも怪我人が出ていますよね。

板東：でも、大したことはありませんでした。やはり、橋から落ちた方がすごかった。

今西：この時の処分はどのような基準で出されたのですか。同学会に処分が出さ

れたわけですか。

板東：同学会幹部としてぼくらは処分を出されたわけではないんです。同学会はタッチしていないことになっていますから。それぞれ個人の行動責任として処分されたんです。ですが、法経第一教室でも、中で実際に何かやったわけでは全くないんです、ほくも松浦も。

今西：中に入って暴れたり器物破損をしたりということはやっていないのですか。

板東：一切入っていないのだから。行けとも言っていない。教室を借りたのは同学会ですが、実際的な責任者というわけではありません。

今西：松浦さんの処分はどういう基準で決められたのですか。

板東：あれは、全くの狙い撃ちです。京大側から見ればやはり指導者ですから。一方で、同学会自体は出来たばかりだから潰さない方がよいという意見も大学側は持っていたように思います。荒木も、ほくらと一緒に表に出ていたわけではありませんから、処分される理由は本来無いのですが、どういうわけか処分されてしまったのですね、党では彼だけが。それぞれに処分の理由は付いているのです。松浦の場合は、法経一番教室にいたわけではないのに、いたということにされてしまった。

今西：集会にはいなかったのですか。

板東：いなかった。ほくらと一緒に時計台の屋根の上で見ていたんですから。

今西：荒神橋にはいたのですよね。そのように言う人もおりますが。

板東：いなかった。ほくと一緒に後から自転車で飛び出して行ったのですから。それは間違いない。処分を出したのは瀧川幸辰総長ですが、前の服部(峻治郎)総長の時だったらあんな処分は出なかったと思いますよ、我々ともよく通じていましたから。おそらく、文部省から相当きつい圧力がかかっていたのではないのでしょうか。学生運動が生きていたのも、細胞が生きていたのも京大だけでしたから。東大でも200人程度しかいませんでしたよ。

今西：東大は壊滅状態でしたよね。

板東：駒場にある程度残っていたぐらいです。それでも100~200人でしょう。

京大は1000人近くいましたから。教職員を入れたら相当な数です。

今西：松浦さんの支援裁判はやられたのですか。

板東：一緒にやりましたよ。

今西：松浦さんの話だと、裁判を続けたら無期停学の人間が大学に戻れなくなるから途中で止めたということですが。つまり、一審で止めて控訴はしなかったと。

板東：控訴しなかったことについては、彼とは何も打ち合わせたりはしていません。彼もずるずると続けているわけにはいかないし、立命館に行くことに話がついていましたから、ほどよいところで止めた、ということではないでしょうか。文部省相手の喧嘩ですから難しいですよ。

他の国立大学での対応は全く違っていました。全学連の中央委員会で神戸大学を貸して欲しいと、当時神戸大の学長だった古林喜楽さんのところに、関西学連委員長として頼みに行ったんです。やはり国立大学でやりたかったので。古林さんには、高校時代から可愛がってもらっていましたが、許可してもらって、学生部長以下きちんと対応してくれた。ところが、ここでまた天皇とぶつかる。中央委員会と同じ日に神戸大学に天皇が来ることになったんです。それで結局、六甲台のキャンパスでは出来ずに、当時の教育学部でやることになりました。神戸大学だけでやるのはまずいというので、大阪市大でもやりました。大阪市大の時は、大阪商工会議所と交渉してレセプションを開いてもらいました。全学連のレセプションを商工会議所でやるというのも珍しい話ですが、学生就職連盟(就学連)という大学側と経営者側の組織が、就職問題もあるので、やろうということになった。学生運動は大衆運動としてやっていくべきだと考えていましたから。また関西学連の大会を滋賀大学で開いたこともあります。

その後、翌54年に本来は卒業する年だったのですが卒業せずに、55年の砂川闘争に入っていきます。その時一緒にやったのが、政治評論家の森田実や教員組合の石井です。この時、先ほど言った、学生運動は労働者や農民に奉仕するのではなく、学生のそのものための、層としての学生の運動であるというテーゼを残したんです。それで共産党と大喧嘩になって、ブントができるわけです。

今西：共産党は、学生を戦闘部隊として利用することしか考えませんからね。

板東：1953年7月に朝鮮戦争が休戦になりますね。休戦を勝ち取ったということで喜びまして、京都では商店連盟たちを含めて提灯行列をやることになったんです。ところが共産党のグループ会議で、関西ビューローがやって来て、この休戦は勝ち取ったものである、闘い取ったものであるから、喜んで浮かれている場合ではない、火炎瓶闘争をやれ、と言うわけですよ。提灯行列には婦人会とか人権団体のような小さな組織も一緒に参加しようということでした。そこでぼくは、闘うのは大衆ではないか、街の人達と一緒に闘うのではないか、そこで火炎瓶はないだろう、と反論したんです。党は、自分たちでは動員も出来ないのですから。

今西：党は組織的には壊滅状態ですよ。

板東：党の学対は大阪市大出身の人間で、青対の人間も私たちと親しかったし、同じような意見を持っていましたから、東京のビューローが何か言ってくるけど、ぼくは何とかやっていたわけですよ。

結局、55年に共産党は六全協（第六回全国協議会）で、この五全協時代の方針の全面的否定になった。われわれが模索した共産党批判が実現したのです。私はその後労働問題研究でも同じような問題にぶつかるが、宮本顕治の下でも、結局共産党は五全協時代の大綱は変わらなかったのです。

今西：ところで、大学時代はどなたのゼミに所属しておられたのですか。

板東：松井清先生です。

今西：国際経済の方ですね。

板東：4回生の時には恐慌論をやっていたので吉村達次先生のゼミにも出ていました。

今西：吉村さんは早くに亡くなられましたよね。池上惇さんも吉村ゼミですか。

板東：池上も吉村ゼミでした。その後、島恭彦さんのところに移って、島さんの下で大学に残ったんです。

今西：本日は、長時間貴重なお話をどうもありがとうございました。